

天は大公にして無私なる者なり。人を愛して自らその仁を知らず、人を威して自らその嚴を知らず。日月これに由りて旋躔し、風霆これに由りて発作し、四時これに由りて推移す。しかしてその天は、初よりかくの如きに意あるにあらず、これ天は無私を以て体となし、無為を以て用をなす者か。しかりといへども聡明神智、天に如く者なし。故に曰く、天、高に居て卑に聴くと。また曰く、天の視るは我が民の視る自りすと。

【大体の意味内容】天は大いなる「公」であつて、「私」の無い存在である。人に慈愛を垂れても自分では「仁」徳を備えているとは知らないでいる。人にその威力を及ぼしても、自分ではそのような威嚴を備えているとは気づかない。日も月も天によつてそれぞれの軌道を巡る。風や雷も天によつて発動する。春夏秋冬の四季も、天によつて移ろいく。そもそも、天には初めからそのように万物を運行させようといった意思があるのではない。天は全く私利私欲が無いという状態を本体とし、「無為自然」の用をなす。つまりことさらに何かを狙つて行うことをせず、自ずから成るように任せる。たとえどんなに頭脳明晰で神のごとき才能に恵まれたとしても、天に匹敵するものはない。ゆえに『史記』に曰く、天は何よりも高みにありながら、何よりも卑小なるものの声を聞き届ける。また『書経』に曰く、「天が視る」というのは、「民衆が視る」ことによると。草莽や名もない民衆のような者たちの在り方や意思にこそ、天の本心が反映されているのだ。

幕末の思想家吉田松陰の言葉を思い出しました。

「今の幕府も諸侯も最早酔人なれば扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼みなし」(安政六年北山安世宛書簡)

現代風に訳せば、「今の政府も野党も大企業も官公庁もみんな酔っ払いばかりで救いようがない。名もない雑草のような人々が立ち上がるのを待ち望むしかない」といったところでしょう。現代はそんなに悪い時代ではない、と考えている人も、少なくはないでしょう。であれば確かに、そうした民衆の声や意思も、「天」にたとえられるように今の時代そのものの真実を表わしているのじゃない。ですが他面において、最近コンビニの店長さんたちの悲惨な労働実態が報道されるにつれ、一見便利で快適な私たちの生活が、実際は凄惨なまでの重労働に支えられていることがあらわになってきましたし、それにまつわる怨嗟の声も次第に大きく高くなってきています。

売の上げが下がると容赦なく首が切られるので営業時間の短縮ができません、小学生のお子さんがインフルエンザになっても治療を受けさせられずにイヌを並べて店の奥に寝かせていたとか、「ほとんど虐待に等しい」と分かっているにもかかわらずにもできないありさまの人もいました。

「うしろした声もまだ「天の声」です。」

。